

ノースイースタン・イリノイ大学におけるプレースメント・テストについて

倉元 直樹

東北大学高等教育開発推進センター/東北大学教育情報学教育部・助教授

要旨：大学進学率が向上し、多様な学生を大学に受け入れるようになってきている。補正教育が重要な課題となるが、学生集団の中に、補正教育が必要な者と、直接大学レベルの教育を受けることが可能な者が混在する状況が生まれてくる。プレースメント・テストとは、多様な学生集団に対し、補正教育の必要性を判定するために必要なものである。

ノースイースタン・イリノイ大学は、全米でも有数の人種的に多様な大学である。測定・テストセンターを設け、3種類のプレースメント・テスト、2種類の英語習熟度テストを実施している。入学直後に全員がプレースメント・テストを受験する。数学、英語のみが対象であり、教科の内容に踏み込まないのが特徴と言える。

米国とわが国のテスト文化の違いを念頭に置くことが条件であるが、ノースイースタン・イリノイ大学の実践は参考になる部分が多い。

キーワード：プレースメント・テスト、補正教育、多様な学生、数学、英語

1. はじめに —プレースメント・テストに関する研究の必要性—

1990年代には上昇の一途をたどり、ユニバーサル段階（トロウ、1976）の目安と言われる50%に達しようとした大学進学率も近年は停滞する傾向にある。その結果、平成21（2009）年に大学進学志望者数と大学の収容能力が一致して、大学全入時代が来るとされていた予測（中央教育審議会、1997）が2年前倒しに実現されると言われている。大学にとって学生獲得に向けての圧力がますます高まってくる。このような状況を受け、就学準備の面で多様な学生を受け入れざるを得ない大学が増えてくることが予想される。

就学準備の多様性の問題には、大きく分けて2つの要素が絡むと考えられる。

ひとつの要因は、入学者の学生を送り出す母体そのものの変化である。もちろん例外はあるにせよ、現在までの大学入学者のほとんどは、高等学校からの新卒者と高校卒業後に進学を目指して受験勉強を続ける既卒者（いわゆる浪人）から成っていた。それが大きく変わってくる可能性がある。すなわち、

従来ならば大学に就学するとは考えられていなかった人々を、学生として広範に大学に迎え入れる可能性である。具体的には、いったん社会に出て就労した経験を持つ社会人、海外から日本に進学する留学生などである。いずれにせよ、従来、学生の主力とみなされなかった層が学生のかなりを占めるケースを予め想定しておかなければならない。この場合、入学直前まで高校で教育を受けてきた層とは異なり、一定の内容、一定の水準で、入学直前まで就学準備を行ってくることを期待することは難しい。

2つ目は、従来と同じ高校新卒者を入学者の主力とする場合である。その場合でも、従来は大学進学の対象とならなかった層を受け入れざるを得ないケースを想定しておかなければならない。これにはさらに2つの問題が絡む。ひとつは進学率の上昇に代表されるように、従来は進路として大学進学を考えて来なかった層が入学してくる問題である。このような層の学生には、基本的に大学で教育を受けることを前提とした十分な準備を期待することは難しい。もうひとつは、巷間に「学力低下」問題として知られているように、教育政策と教育環境の変化によっ

て従来から大学に進学している層の就学準備状況が現在よりも整わなくなる可能性である。

いずれにせよ、進学者、入学者の就学準備状況の悪化と言う環境の中で、大学がその教育の質の維持、向上を目指すとするならば、大学レベルの教育に向けての準備教育を大学自身が行う必要に迫られる。いわゆる、「補正教育 (レメディアル教育)」が大きな課題となってくる。なお、本稿はレメディアル教育自体について論じるものではないので、その内容に関しては、調査に関わる部分を除き深く立ち入らない。

さて、ここで考慮に入れておかなければならないのは、全ての大学で全ての学生の就学準備が一様に不足するわけではない、ということである。

まず、大学によって入学者選抜の事情が大きく変わってくる。具体的には大学入学者選抜に3つの類型が考えられる。すなわち、従来から典型的な大学入試の状況として考えられてきた「競争選抜」の形態を継続できる大学、一定の要件を課してその要件に合致する者だけを受け入れる「資格選抜」に移行する大学、実質的に志願者を全て受け入れることになる「開放入学制 (オープン・アドミッション)」の大学という、大学の特徴による機能分化である。ちなみに、米国では4年制大学に占めるその割合は、競争選抜制が10~15%、資格選抜制が70~75%であり、残りが開放入学制となっている (荒井, 1997)。わが国においても米国と同じような比率で大学が機能分化していくのかどうか、その保証はないが、ひとつの目安として参考にすることは可能であろう。

競争選抜制、および、資格選抜制の大学の入学者選抜が、文字通りにその機能を果たすならば、就学準備という問題においては相対的に大きな問題は生じないかもしれない。もちろん、学生の送り出し側である高校のカリキュラムが、大学教育の前提として必要となる準備教育とどの程度合致するのかという問題は残るが、入学者の就学準備状況については、ある程度一定の水準を保てる可能性が高い。問題は、開放入学制の大学、および、競争選抜制、資格選抜制の枠組みの入学者選抜を行っていても実質的には開放入学制に近い入学者選抜状況となる大学である。そのような大学では、就学準備の整わない学生を大量に抱えることになるであろう。

ところで、開放入学制の下においても、全ての入

学者の準備状況が不足するわけではない。準備状況の多様さ、学生の多様性が、解決すべき次の課題となることが予想されるのである。すなわち、学生集団の中に、補正的な教育プログラムによって準備状況を整えることが必要な者と、直接大学レベルの教育を受けることが可能な者が混在する状況が生まれてくるということである。このように、就学準備状況の面で多様な学生が混在する状況で、全ての学生に一律に補正教育プログラムを与えることは教育効果の上でもコストの上でも問題が多い。したがって、何らかの方法で学生の状態を識別し、補正教育を施す必要がある者を特定していく必要がある。

本稿が主題とする「プレースメント・テスト」とは、まさしく、そのような多様な就学準備状況の学生集団に対し、個々の学生に対して補正教育の必要性を判定するために必要となるものである。

この度、ノースイースタン・イリノイ大学 (Northeastern Illinois University; 以下、主としてNEIUと表記する。) におけるプレースメント・テストに関して訪問調査をする機会を得た。米国の大学におけるプレースメント・テストの運用の事例のひとつとして、報告を行うものである。

2. ノースイースタン・イリノイ大学 (NEIU: Northeastern Illinois University)

2.1. 大学の沿革

NEIUはイリノイ州にある7つの4年制州立大学のひとつである。1867年に設立された教員養成学校を起源とする。1961年にシカゴ市内の現在のキャンパスに移り、1971年からNEIUとなった。Higher Learning Commission of the North Central Association によって大学としての認証を受けている (Northeastern Illinois University, 2004a)。

2.2. 大学の特徴

学部は文理学部 (College of Arts & Sciences)、経営学部 (College of Business & Management)、教育学部 (College of Education) の3つである。大学院 (Graduate College) は全体でひとつの組織であり、修士課程までのコースが存在するようである。個々の専攻別に研究科等といった単位で分かれている訳ではない (Northeastern Illinois University, 2004a)。NEIUは、一般的に教員養成のイメージが強い大学だそうである。

学生数は学部と大学院を合わせて約11,000人で、その半数以上が週12時間未満のパートタイム学生である。教員数も常勤が約350人、非常勤が約230人という小規模大学である。フルタイムの大学院生は300人あまりと少なく、学部教育が主体の大学である。学生の6割が女性であり、人種、民族的には極めて多様である。ここ10年余りの傾向としては、ヒスパニック系の学生比率が10ポイントほど上昇して2002年の秋の時点で約25%に達している。その分、白人の比率が約60%弱から40%強に減少している。ちなみに、新入生に限って言えば、2002年の時点では、ヒスパニック系が38%を占め、白人(34%)を押さえて最多となっている。なお、母語という側面而言えば、半数以上の学生が英語以外の言語を第一言語としているそうである。

学生の出身地にも大きな特徴がある。少数の例外を除き、95%の新入生の出身学校はシカゴとその近郊である。編入生もその8割強がイリノイ州内の高等教育機関の出身である。大学独自の寮を持たないコミュニタ・カレッジであることも大きな要因となっているのであろう。

学生の年齢も多様である。新入生、編入生では18~22歳が全体の54%と過半数を占めているが、31歳以上の学生も約18%在籍している。新入生では約90%が18~22歳であるが、編入生では18~22歳という年齢層の比率が約37%と低い一方、31歳以上で23%を占める(以上、Northeastern Illinois University, 2003)。

学費は、米国の大学にしては相対的に安い方である。16単位まで、学費は単位あたりで計算されることになっている。ちなみに、2004-2005年度の学部新入生の場合、イリノイ州の出身者に対する1単位あたりの授業料は\$124.00、手数料\$25.85、合計\$149.85である。州外の出身者は、授業料が\$248.00で手数料は同じである。フルタイムの目安となる12単位で計算すると、州内の出身者は\$1,798.20(\$1.00 = 110円で換算して、約19万8千円)、州外の出身者は\$3,286.20(約36万1千円)である(Northeastern Illinois University, 2004a)。

2.3. 評価

2005年版US News & World Report誌のランキングによると、NEIUは人種的多様性(Campus diversity)の指標で中西部地区のトップにランクさ

れている。その最大のマイノリティ・グループはヒスパニック系で、30%となっている。さらに、卒業生における学生ローンの残高の少ない(least debt)大学ランキングで中西部の第5位に顔を出し、借入れを行っている学生の割合も26%と少ない。この指標の意味するところを正確に汲み取るのは難しいが、おそらく、学費の安さによって経済的負担が抑えられているのと同時に、卒業しても必ずしも高収入に恵まれるわけではないために積極的な借入れが行えないことをも意味しているのではないだろうか。

総合指標においては、中西部における修士課程までの教育プログラムを持つ大学のランキングで108~142位に当たる第4層(fourth tier)、すなわち、最下層にランクされている(US News & World Report, 2004)。

NEIUは、明らかに、高い評価を受けていない米国の一般的な大学の典型例と言える。しかも、多様性に富むと言う意味では、本調査の対象としてふさわしい。

2.4. 入学者選抜

入学者選抜の方式は、制度としては資格選抜制に属する。高校新卒の新入生の入学基準として「席次がクラスの上位1/2」、または、「ACTの合計得点が19点以上、あるいは、SATで890点以上」であれば入学資格がある。加えて、高校在学時の単位取得科目なども挙げられている(Northeastern Illinois University, 2004b)。しかし、救済措置もあり、実質的にはオープン・アドミッションに近い状態だそうである。

2002年の時点においては、通常の学士の学位を目指す入学志願者数が2,471名に対して入学許可が与えられた者が1,911名、約77%が合格である。あらかじめ定められた定員に対する競争選抜という形ではないので倍率という概念は適当ではないかもしれないが、日本流に倍率に換算するならば、約1.29倍といったところである。その中で1,059名が入学しており、合格者の中の入学率(歩留まり率)は約55%となっている。

編入学の割合も大きい。2002年では1,712名の志願に対して1,353名が入学許可を与えられている。約79%の合格率、約1.27倍である。実際の入学者は1,035名、歩留まり率は約76%である(以上、

Northeastern Illinois University, 2003)。

編入学者の出身大学を見ると、大半が近隣のいわゆるコミュニティ・カレッジの出身である。4年制大学の出身者もいるが、イリノイ大学シカゴ校 (University of Illinois-Chicago: US News & World Report [2004] による総合大学ランキングで第3層)、ノーザン・イリノイ大学 (Northern Illinois University: 総合大学第4層)、コロンビア大学 (イリノイ州) (Columbia College, IL: 修士課程までの大学第4層)、デュポール大学 (DePaul University: 総合大学第3層)、イリノイ州立大学 (Illinois State University: 総合大学第3層)、など、ほとんどが州内の大学からの編入のようである。4年制大学からの編入の場合、成績などの学業の問題、学費などの経済的な問題などが編入の理由になっているケースが多いそうである。

3. プレースメント・テスト

3.1. 測定・テストセンター

プレースメント・テストを司る「測定・テストセンター (Assessment & Testing Center)」は事務組織の一部である。学務部 (Academic Affairs) 中の学生支援組織 (Academic Development) の1つのセクションとして位置づけられている。

測定・テストセンターでは、3種類のプレースメント・テスト (Placement Test)、2種類の英語習熟度テスト (English Competency Test) を実施している。

職員は4名の常勤職員に加え、大学院生の非常勤職員が2～3名といった体制である。コーディネータが1名で統括責任を担う。他にデータ分析担当職員が1名、庶務的な仕事を担う者が2名である。4名の常勤職員の中で、博士号を有するのはコーディネータの Dr. Kasai だけということであった。

測定・テストセンターでは、実質的にテストの実施も全て行っている。大きく分けて、2回のセメスターとサマーセッションの3つの学期があるが、プレースメント・テスト、英語習熟度テストという2種類のテストは、それぞれ1学期に10～20回、年間40～50回程度実施されている。ちなみに、2003年度においては、プレースメント・テストが43回 (うち、5回は数学のみの実施)、英語習熟度テストが41回実施された¹⁾。

テストには繰り返し同じ問題を利用するが、その内容は完全に秘密である。したがって、本報告においても問題内容の詳細については詳らかに紹介することができない。当然、試験後の問題の持ち帰りは許されないし、内容を他の学生に教えることも許されない。問題冊子には番号が振られており、その管理は徹底している。

なお、それぞれの下位テストには、年間の延べ人数で約1,600～2,000名の受験者がいる (以上、Assessment and Testing Center, 2004)。

3.2. プレースメント・テストと補正教育

3.2.1. プレースメントテスト

原則的に、入学直後に全員がプレースメント・テストを受験することになっている。

プレースメント・テストには「数学 (Math Placement Test)」、「読解 (English Reading Placement Test)」、「作文 (English Writing Placement Test)」の3種類がある。学生の知識、スキルのレベルを判定して、適切なレベルの授業を受講させることが目的である。

NEIUの卒業要件には、数学 (MATH-102: 大学レベルの最初の数学コース、それに加えて1つ)、および、英語 (ENGL-101: 大学レベルの最初の作文コース) の単位取得が含まれているが、プレースメント・テストは、学生がこれらの科目を受講するレベルに達しているかどうかを判定するものである。

プレースメント・テストの成績が芳しくない場合、上記の必修授業を取ることはできない。受講のレベルに達していないと判断された場合には、補正教育 (発達コース [developmental course] と呼ばれているようである) を受講することになる。数学の場合、75%～80%、英語の読解では70%程度、作文は30%強が補正教育を受ける。ちなみに、2003-2004年度では、数学で75.1%、読解で66.9%、作文で33.4%の学生が補正教育の必要あり、と判断された (Assessment and Testing Center, 2004)。

なお、補正教育プログラムとしては以下のコースが用意されている (Northeastern Illinois University, 2004a、訳出責任は筆者)。なお、卒業要件となっているMATH-102についても、レベルが低いので補正教育とみなすべきだとの意見もあるとのことであった。

3.2.2. 数学の補正教育プログラム

3.2.2.1. MATH-DEV-90 (代数学入門、3単位)

卒業単位に加えることはできない。実数とその演算。分数、小数、百分率、比の復習。幾何、統計、測定への応用を含む。文字式と一次式の入門。履修要件はプレースメント・テスト。

3.2.2.2. MATH-DEV-91 (基礎代数学、3単位)

卒業単位に加えることはできない。初等代数学。符号、数式、指数法則、演算の順序、一次方程式と不等式、文章題、公式、多項式、因数分解、根、連立方程式。

履修要件はMATH-DEV-90で成績C以上、または、プレースメント・テスト。

3.2.3. 読解の補正教育プログラム

3.2.3.1. READ-DEV-095 (読みのワークショップ、3単位)

卒業単位に加えることはできない。大学レベルの教科書を読むために必要となる読解スキル、読解方略の発達。長所、短所を診断、および、自己測定で同定。実際に読み、読む過程や読んだ後での理解度テストの問題を解く前に、理解力を高めることを目的とする。受講には許可が要る。

3.2.3.2. READ-DEV-101 (読解、3単位)

大学レベルの教科書を読むためのより習熟度を高める機会を提供する。情報の整理、ノートの取り方、読んだ物についてのディスカッション、読んだ物についての作文に重点。受講には許可が要る。

3.2.3.3. READ-DEV-115 (英語第2言語話者のための読み、3単位)

英語の読解力を高めたいノンネイティブのニーズに合致。集中した読み、語彙の獲得、会話、作文によって、能動的な読みを促進する。文意をつかむことに重点。異文化コミュニケーションの重要性、言語と文化の関係の理解を促進。受講には許可が要る。

3.2.3.4. READ-DEV-116 (上級英語第2言語話者のための読み、3単位)

英語の読解力をさらに高めたい上級のノンネイティブ話者のニーズに合致。内容に特化した物を含むより複雑なジャンルを理解するため、解釈、推論、批判的分析、評価、応用、著者の文体と語調、技術的、文学的用法に重点。受講には許可が要る。

3.2.4. 作文の補正教育プログラム

3.2.4.1. ELP-ESL-108 (リスニングとスピーキング、3単位)

英語学習者用。アメリカの大学で使われるリスニング、スピーキングのスキルを練習。短い授業の理解、短い報告のプレゼンテーション、ディスカッションへの参加に重点。

3.2.4.2. ELP-ESL-110 (英語文法スキル、3単位)

英語学習者用。選択された英語の文法パターンの分析と練習。授業での応用に重点。ELP-ESL-120と一緒に受講のこと。

3.2.4.3. ELP-ESL-112 (英語ワークショップ、3単位)

英語学習者用。英語による自分用の作文の基本原則。文のレベルでの進歩に重点。

3.2.4.4. ELP-ESL-114 (英語ワークショップⅡ、3単位)

英語学習者用。英語による個人的経験に基づく説明的な作文の基本原則入門。文のレベルでのスキルを向上させるための集中的な学習。

3.2.4.5. ELP-ESL-120 (英語ワークショップⅢ、3単位)

英語学習者用。英語による説明的な作文の練習、指導。段落の展開、書き言葉としての英語の流暢さ、校正スキルに重点。

3.3. 英語習熟度テスト

測定・テストセンターが提供するもうひとつのテスト、英語習熟度テストの内容も簡単に紹介することとする。

テストの内容は読解と作文である。学生が卒業するまでに、アカデミックな分野、または、プロフェッショナルな分野で成功するための作文と読解のスキルを取得しているかどうかを判断する。十分なレベルに達していないと判断される場合には、受講すべきコースが推薦される。

英語習熟度テストの受験も早い方が望ましい。1、2年生で英語 (ENGL-101) を修了した段階で受けるのが理想的である。テストの難易度レベルも、その辺を想定して設定されている。

作文においては、例えば、文法、構成といった部分のどこが特に弱いかを診断する。読解については、全体的な得点で判断する。

3.4. 問題作成、採点

テストそれ自体に関しては、プレースメント・テストと英語習熟度テストで大きな違いはない。以下、特に必要がある場合を除き、一括して紹介する。

数学と読解については、既製のテストを購入している。問題の統計的な性質には裏づけがあり、実際、項目分析を行っても統計的に問題のある項目は見当たらないそうである。一度購入したものについては、何年も同じ問題を使っている。当然、持ち帰りは許されないし、問題の漏洩も、現状のところはぼ心配ないそうである。

作文はオリジナルで開発している。米国における他のテストと同様に、項目開発、試行、という手順を踏んで実用化される。

合否の基準は、項目反応理論 (Item Response Theory) の特性推定値等の理論的に高度なものではなく、得点で決めているということであった。数学については、数学科が基準を設定し、英語は英語科、および、英語の補正教育を担当する補習科 (English Language Program) が策定しているとのことであった。作文の開発、採点も同じ部署が担当しているとのことである。

3.5. テストの構成

数学のプレースメント・テストは、全て4肢選択である。

4種類の冊子があり、「算数 (Arithmetic Skills: 32問、簡単な四則演算やグラフの読み取りなど、制限時間30分)」、「初等代数 (Elementary Algebra Skills: 35問、簡単な文字式など、制限時間30分)」、「中級代数 (Intermediate Algebra Skills: 30問、不等式、やや複雑な文字式など、制限時間30分)」、「関数とグラフ (Functions and Graphs: 30問、恒等式、関数、角度、三角関数など、制限時間30分)」といった分野をカバーしている。

解答はマークシート方式である。

最初の2つは基礎的な問題、残りの2つは上級の問題であるが、どちらを受験するかは志願時に提出するACTの得点を基準として判断されるとのことであった。また、上級の問題を受験した結果、特に成績が良い場合にはMATH-102の単位を認定してもらえるそうである。

読解のテストは1種類で、全て5肢選択である。

まず、英語学習の履歴等に関するアンケート9項目に回答する。次に、「語彙力 (Vocabulary, Comprehension)」に関する問題を解く。最初に成績に関係しない練習問題を解き、それから語の説明について簡単な質問が80問続く。時間は15分である。

次に、「読解 (Comprehension)」に関する問題に進む。読解の問題では、7種類の短文を読むことが要求される。一番長いもので600語程度、残りの6問は300語程度の長さである。それぞれの文を読み、その内容に関する問題に解答する。それぞれ、1つの短文につき5～8問を20分で解答する。

なお、英語習熟度テストも同じような形式であり、より難しい内容になっているそうである。

作文はいわゆる「課題型」の形式である。単一のテーマ1問に対して、実際に1つの作文を書く。作文の分量はA4版に2枚程度 (300～500語) である。具体的な例示を交えて論理的に書くことが要請される。また、文法、句読点、文章構成等もきちんと書かなければならない。

作文のテストはプレースメント・テストと英語習熟度テストで平行テストの形式を取っている。すなわち、問題内容は違うが、難易度は同じくらいの程度に設定されている。

先述のように、プレースメント・テストでは、得点によってどの授業を受けるかについて直接診断を行う。英語習熟度テストでは、合格か不合格かを判定する。

4. まとめ

NEIUでは人種的な多様性が大きく、全ての学生に基礎学力において高い水準を期待できないという大学の特徴から、プレースメント・テストが大きな役割を果たしている様相をうかがい知ることができた。そこから、NEIUのプレースメント・テストには、我が国の大学で一般的に行われているテストと比較して、いくつかの大きな特徴があることに気づかされる。

まず、第1点は、そのカバーする内容である。NEIUのプレースメント・テストの分野は大きく分けて「英語」、「数学」の2つであると言ってよい。極めて限定的に絞られた分野である。すなわち、大学教育の個々の学習領域には踏み込まず、あくまでも全ての分野で一般的な学習スキルとして必要な最低限の分野のみをカバーする、という考え方と言ってよいであろう。

第2点は、実施方法である。全員一斉に同じ日に受験するという形態を取らず、年間に何十回も受験機会を与えている。その代わりに、1度の試験機会に

おける受験者数は少数に抑えられている。

第3点は、試験問題の種類である。数学においては、学生の能力レベルに関する事前情報に基づき、異なる難しさの試験問題が用意されている。その一方で、受験する機会がバラバラであるにも関わらず、同じ試験問題を用いていることは、我が国では考えられない方法と言える。

第4点は、上記の問題とも絡むが、試験問題の秘匿性である。試験問題を一切公開しない、という原則が貫かれており、その管理は徹底したものである。

第5点は、問題作成である。作文の問題を除き、市販のものを購入して、何年間も同じ問題を用いている。オリジナルの問題も含め、必ず試行を行って、試験問題の統計的な性質を確認した上で実施していることも大きな特徴と言える。

以上のような特徴は、NEIUの独自性というよりも、テスト、試験というものに関する米国の考え方が反映されたものと言えるであろう。テストそのものはあくまでも能力の診断のためであり、教育的効果に関する期待は一切ない。学生がテストに向けてスキル向上のトレーニングを行うようなことも想定されていないと思われる。その結果、極めてシンプルな形式の問題で、しかも、同じ問題を何度も何度も使い回すこともできるのである。この方法であれば、プレースメント・テストの運営費を比較的低額に抑えることが可能となるだろう。

しかしながら、プレースメント・テストの考え方、運営、管理、コストのいずれをとっても、NEIUのような方式が我が国の大学に適合的かどうか、慎重に配慮すべき点は多いと思われる。

また、もう一つの重要な鍵は、カリキュラムに関する考え方の問題である。筆者は外国の大学のカリキュラムに関して詳しいわけではないので、誤解があるかもしれないが、アメリカの大学では授業に番号が振られており、その内容、必要な前提スキルに関してきっちりとした規定が成されて毎年受け継がれていくのが通例のようである。補正教育用の科目、正規の卒業単位認定科目に関わらず、授業の内容が明示的に決められていることで、プレースメント・テストの位置づけが明確になる。したがって、プレースメント・テストが機能するためには、それ以前に大学の初年時教育におけるカリキュラムが高度に構造化されている必要があるのではないだろうか。

最後に、プレースメント・テストに関してNEIU独自の課題に触れておく。Dr. Kasaiによれば、NEIUのテストは第一言語の違いを考慮していない点で課題が残るとのことであった。「英語」に関するレメディアル教育では、英語を母語としない学生を対象として手厚い教育プログラムが組み立てられているのと対照的である。

例えば、語彙の問題は、多数の項目に対して短い時間で答えなければならないが、それらの単語が本当に授業の内容を反映したものか、英語を第二言語とする学生にとって適切なものなのか、内容的な吟味が十分とは言えないとのことであった。読解の問題では、短い時間で長い文章を読まなければならないが、制限時間内に速読を求めることにどれほどの意味があるのか疑問である。むしろ、ゆっくり時間を掛けて内容的に深い理解を求める方が適切なのではないか、と考えているそうである。

数学の試験では、問題文の英語の意味が分からないために正解に達しない学生も多いのではないかと推測される。すなわち、純粹に数学の能力を測定しているのかどうか疑われる。もし、試験会場に、英英辞典等、英語に関する辞書を持ち込むことを許可した場合、得られる得点に変化が見られるか、といった点が、今後検討を要する課題の一例だそうである。

わが国の状況に照らして考えた場合、現在は、多くの大学では全般的な基礎学習能力以外にも大学入学以前に何を学習してきたのか、と言う、学習内容の問題を抱えていると思われる。すなわち、特に理系の分野で、高校時点で選択可能な特定の科目のうち何が既習であるか、未習であるか、また、どの水準まで学んできているのかといった問題が、就学準備状況という面で最も中心的な課題であると思われる。

しかしながら、近い将来、入学者の基本的な「国語力」、「数学力」を確認して適切な授業レベルを選択させるプレースメント・テストの考え方も、確実に重要になってくることが予想される。

付記

本研究は、平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 [A])、研究課題番号 15203031、(研究代表者 白川友紀)における研究の一部として

実施されたものである。

文献

荒井克弘 (1997). 戦後日本の大学入試 国立大学入学者選抜研究連絡協議会編 入試研究の基礎知識 (セミナー資料)、42-54.

Assessment and Testing Center (2004). Annual Report: Fiscal Year 2004 Assessment and Testing, Assessment and Testing Center, Northeastern Illinois University.

中央教育審議会 (1997). 21世紀を展望したわが国の教育の在り方について (第2次答申)

Northeastern Illinois University (2003). Annual Report and Profile of Admissions and Records 2002-2003.

Northeastern Illinois University (2004a). Northeastern Illinois University Academic Catalog 2004-2005.

Northeastern Illinois University (2004b). Northeastern Illinois University Viewbook 2004-2005.

トロウ, M., 天野郁夫・喜多村和之訳 (1976). 高学歴社会の大学 - エリートからマスへ -, 東京大学出版会

US News & World Report (2004). America's Best Colleges 2005 edition.

¹本稿末に2005年春のセメスターにおけるプレースメント・テストの実施スケジュールを掲載する。

CLS3031教室は35名、CLS1001、CLS1002教室は約100名が収容可能だそうである。



Math and English Placement Test Schedule

Assessment and Testing Center, CLS 3026

(773) 442-5293, assess@neiu.edu

Office Hours: Mon - Th 8 am - 7 pm; Fri 8 am - 4 pm

Visit www.neiu.edu/~assess for study guides and detailed exam information

Spring 2005

JANUARY			
Date	Day	Time	Room
01-03-05	MONDAY	12:00 noon	CLS 3031
01-05-05	WEDNESDAY	12:00 noon	CLS 3031
01-06-05	THURSDAY	5:00 p.m.	CLS 3031

FEBRUARY			
Date	Day	Time	Room
02-21-05	MONDAY	12:00 noon	CLS 3031
02-23-05	WEDNESDAY	12:00 noon	CLS 3031
02-25-05	FRIDAY	12:00 noon	CLS 3031

MARCH			
Date	Day	Time	Room
03-18-05	FRIDAY	12:00 noon	CLS 3031
03-21-05	MONDAY	12:00 noon	CLS 1002
03-23-05	WEDNESDAY	12:00 noon	CLS 1002
03-29-05	TUESDAY*	1:40p.m.	CLS 1001
03-31-05	THURSDAY#	1:40p.m.	CLS 1001

APRIL			
Date	Day	Time	Room
04-11-05	MONDAY	12:00 noon	CLS 3031
04-20-05	WEDNESDAY	12:00 noon	CLS 3031
04-21-05	THURSDAY*	1:40 p.m.	CLS 1001
04-23-05	SATURDAY	9:00 a.m.	CLS 1001
04-30-05	SATURDAY	9:00 a.m.	CLS 1002

MATH ONLY #

ENGLISH ONLY *

ADVANCE REGISTRATION FOR ONE OF THE ABOVE TIME SLOTS IS REQUIRED.

BRING SEVERAL #2 PENCILS.

**FAILURE TO APPEAR FOR YOUR APPOINTED TIME CAN PREVENT FUTURE REGISTRATION.
IF YOU NEED TO CANCEL YOUR TIME, YOU MUST DO SO 48 HOURS IN ADVANCE.**

Math Placement Test begins at the time indicated above; English Placement Test begins approximately one hour and 15 minutes after the specified time.

Total Test Time: 3 ½ hours for math and English

Check-In: 10 minutes before exam time

Test Results: Academic Advising in A109, (773) 442-5470

****NO LATECOMERS OR STUDENTS WITHOUT ID WILL BE ADMITTED****

****THERE WILL BE NO EXCEPTIONS****

MAKE SURE TO FAMILIARIZE YOURSELF WITH POLICIES AND PROCEDURES STATED ON THE BACK OF THIS SCHEDULE.

Placement Tests in Northeastern Illinois University

Naoki KURAMOTO

*Associate Professor, Center for Advancement of Higher Education, Tohoku University;
Education Division, Tohoku University Graduate School of Educational Informatics*

Abstract: According to the increasing enrolment rate in higher education, university campuses are getting more diverse. Remedial program is one of the most important issues in this situation. There are some students who need special programs before they take university level classes, however others do not. We need placements tests to identify the needs for remedial programs.

Northeastern University has one of the most diverse campuses in the US. They have an assessment and testing center. They run three kinds of placement tests and two kinds of English proficiency tests. Every student takes it right after the enrolment. They have Mathematics and English tests, but no content-based subject tests.

As far as we realize the difference between the US testing culture and the Japanese culture, we would be able to learn a lot from Northeastern Illinois experiences.

Key words: placement tests, remedial education, campus diversity, Mathematics, English